

第 60 回自治体学校 in 福岡 移動分科会レポート

自治体学校現地分科会 22 は、「熊本地震災害の現地と復興の現状・課題を見る」として、一昨年（2016 年）4 月 14 日、16 日の 2 度襲った熊本地震の被災地を見学し、復興の現状、今日的な課題（現地の住民の方の意見）を聞きながら学ぶ分科会であった。

熊本地震の県内の被災状況は、直接死（地震による死亡）50 人。これに対して震災関連死が 209 人となった。また、被災建物も 197,575 棟その 6 割が熊本市であった。仮設の入居状況は、プレハブなどの建設型仮設住宅が 3,276 戸。旅館・ホテルなどに入居したみなし仮設が 10,656 戸。公営住宅などが 545 戸。合計 14,477 戸の仮設住宅に入居している。地震から 2 年が経ち、入居期限原則 2 年という壁につきあっている。災害公営住宅の建設も西原村で 12 戸完成したが、仮設入居世帯の数からして大きな開きがある。

今回の移動現地分科会では、被害の大きかった益城町と阿蘇大橋が崩落した、南阿蘇村の現場を益城町は、元町議会議員の甲斐康之氏、南阿蘇村は村役場の職員が説明していただいた。

■益城町

2 度の震度 7 の揺れで家屋が潰れ TV 中継され益城町に初めて入った。倒壊家屋は片づけられて更地が、痛々しい街並みだった。問題に思われたのは①熊本県が進める「創造的復興」の名の下で 2 車線の歩道もない県道を、4 車線の県道に拡幅する計画が進められている。問題なのは、拡幅に区画整理事業が手法として使われていること。住民は、約 1 割におよぶ減歩によって県道拡幅を進めるやり方に不満を募らせている。合意のない上からの県道拡幅計画がストップしており、住民からは「4 車線の県道ではなく、歩道を付けた 2 車線の県道を」との声が上がっている。測量も進んでいないと報告があった。

■南阿蘇村

地震によって南阿蘇村の立野地区の山が大規模な土砂崩れが発生し、この影響で阿蘇大橋が崩落したと言われている。阿蘇大橋の近くには東海大学農学部の阿蘇キャンパスがあり、約 1000 人余りの学生が学んでいた。学士寮が倒壊し学生が亡くなるという痛ましい現場でした。大学は今は熊本市内にキャンパスを移し、元大学キャンパスに続く並木道や石碑が残されているだけであった。地震後は 1000 人余りの学生も熊本キャンパスに移動したために現在は地元の方々 40 世帯余りがひっそりと住んでおり、廃墟となったアパートなど地震の影響の大きさを痛感した。

さらに、この阿蘇大橋が崩落した現場は阿蘇山の火山灰が堆積した場所であり、地盤が弱いところであった。ここに立野ダム（治水ダム）の計画があり、今年度着工、2022 年度完成を目指している。阿蘇大橋の崩落によって土砂崩落が現実のものとなった今、この現場近くにダムの建設が必要かまた、建設ができるのか問題が明らかになってきたと思う。

（高橋 初）